

益法人 ベルリン中央学園補習授業校だより

菩提樹

(リンデンバウム)

二〇〇八年度第三号

通算第三十五号

発行
ベルリン中央学園
補習授業校

編集
『学園だより』委員会

発行日
2009年3月6日

ドイツ地区補習授業校 現地採用講師研修会

— 幹事校を終えて —

昨年十月十八日、十九日に「平成二十年ドイツ地区補習授業校現地採用講師研修会」が行われた。本校は、初めて幹事校として、その研修会の企画・運営に携わった。子供たちの教育に直接係わる講師たちが、この研修会を通して何を学び得たのか、今回はその概要をご紹介します。

研修会の意義

補習授業校現地採用講師研修会は、『本邦から教員が派遣されていない補習授業校における現地採用の講師を対象に、教員として求められる学習指導の内容・方法等の基礎的・基本的事項について研修を行い、その資質及び指導力の向上を図り、もって補習授業校に

おける邦人の児童生徒への教育の充実に資することを目的』に、毎年一回実施されているものである。この研修会は、外務省、文部科学省からの支援もいただき実現している。今年度の研修会初日には、在ドイツ日本国大使館より八幡公使にお越しいただいた。

開催地に所在する在外教育施設（日本人学校など）に所属する本邦（日本）から派遣された教員を、毎回研修会指導講師として招き、学習指導法などについて講義・講習をしていただいている。今回は、ベルリン日本人国際学校の相模校長先生と国語科の安部先生に具体的な表現指導方法について講演していただいた。

参加しているのは、ドイツ地区ならびにその近隣に所在する補習授業校の講師（原則二名）で、今回の参加校は十五校（三十二名）であった。補習授業校それぞれ、規模も授業形態も異なるが、補習授業校という限られた時間でより効果的な学習指導の方法を模索している状態や、学習指導上で抱えている問題などは一致している。近年では、特に長期滞在の邦人子女や国際子女が増加しており、補習授業校に求められる対応も進化していかな

ければならない。

年に一回ではあるが、この現地採用講師研修会は、講師の指導力向上に大きな役割を果たしている。また、補習授業校間のネットワークを築くためにも必要だと考える。外国で生活している子供たちの日本語教育の向上を真摯に考え、取り組んでいるのはどの補習授業校も一緒だからである。毎年、とても充実した研修会となっている。（近藤）

幹事校としての新たな取り組み

国語科の学習指導の領域には「聞く、話す、読む、書く、それに伴う言語事項」がある。毎年、研修会ではその全領域について学年別の分科会が開催されるが、二日間という短期間では各校の問題、事例、取り組みの紹介程度で終わり、研究という段階まで至っていないというのが現状だ。

そこで今回の研修会は新たな取り組みとして、補習校の児童生徒には習得が難しい技能である「書く」（表現・作文、言語事項）の領域に絞り、研修を開催した。

講演では表現力の指導についてお話を頂戴した。分科会では事前調査を行い、それらをもとに「書く」領域の問題点を洗い出し分類、分析した。そして、その解決策、具体的な教材や実践例を分科会で紹介、吟味し合い、最終的に分科会ごとにひとつの表を完成させた。そのねらいは、今後「書く」領域で問題が出た時に、どのように解決し、どのような取り組みが効果的か表を参照すればすぐにわかるようにすることにある。事前に解決策等が集

まらなかつた分野では、分科会時に検討し、具体的な教材や実践例を考察した。

このように研修会をひとつのテーマに絞り込んだことで、問題が明確化し、より掘り下げて討議する事ができた。

また、もう一つの新たな取り組みとして、昨年度の研修会の際に希望が出た校長会を分科会と同時進行で実施した。詳細は「校長会」の項をご覧いただきたい。
(松田)

校長会

毎年、その必要性が話し合われつつも実現することができなかった校長会を、本研修会で初めて行うことができた。よって、話すべき課題は山積していたが、四つの議案（教育課程、教員の質向上のための取り組み、学校運営、今後の展望）に絞り、各補習校の実態報告および課題についての話し合いが行われた。ここでは、紙面の関係上、すべてを紹介できないので、保護者にとっての一番の関心事である教育課程（授業編成）および今後の展望について報告したい。

国語の年間授業時数は、各補習校の諸事情によって、ばらつきがあるのが現状である。しかし、教科書を一年間で終わらせるためには、最低でも七十時間は必要である。また、最低三十五週の授業日を確保することが文科省より奨励されている。よって、ドイツの学校休暇との兼ね合いによって、年度ごとに授業時数を変更するのは、望ましくないのが、一律の授業時間の確保を考えていく必要性がある。

また、国語以外の教科の授業に関しては、在籍児童生徒の実情の変容に伴う、ニーズの変化を把握した上で設置する必要性があるとの見解に至った。以前は帰国子女が大半を占めていたが、現在はどの補習校も長期滞在子女、国際児が六〜八割を占めるようになった。その結果、補習校のニーズが変化した。そのことを鑑み、算数を必須とするより、日本を知るための最低限の知識や用語が習得出来る社会科、理科学習が今後必要になるのではないかと。しかし、数の概念、数詞、時間の読み方など日本語の基礎となる部分は低学年のうちに学習する必要がある。また、算数の文章題理解も必要である。以上から低学年のうちには、精選した内容で算数を学習させるほうが望ましい。さらに、算数があるから補習校に来たいという少数ニーズもあるので、このことを考えると、選択制で算数の授業を残す必要性もあるのではないかと結論に至った。

次に、一クラスの編成人数について話し合った。補習校は年齢別学年制度なので、最低人数制限を厳しくすると複式授業を余儀なくされる。工夫により上級生が下級生の面倒を見るなどプラス面もあるが、進度が遅れるなど複式授業は様々な困難を抱える。しかし、教師、生徒の一对一の授業にもまた問題がある。授業を活性化し尚且つ、能力格差を補うための個別指導ができるという点から考えると、五〜十名ぐらいの人数のクラス編成が望ましいが、十分な人数確保が難しいのが現状である。よって、少人数クラスの担任が、工夫した授業ができるような研修会を催す必要性がある。

次に、特別クラス（日本語能力が一定基準に達していないため、通常の国語についていけない子どもを対象としたクラス）の設置について話し合われた。まず、このクラスを設置するにあたっての問題点は、対象者が各学年に一人もしくは二人なので、一クラスにまとめると年齢にばらつきができることである。そうになると、興味、知識などが大きく異なる上、能力格差も十人十色となる。さらに、新たな子供が入ると、その格差はますます広がるのが現状である。よって、特別クラスより、国語補習クラス（国語についていけないようにする。）の設置が望ましいと提案された。しかし、アイデアとしてはよいが、やはり対象者の学年のばらつきがある事から、数名の教師の対応が必要になるので、経済面を考えると実現性は難しい。そこで、対象児童の到達目標を別途に定め、補助教材を使って、国語の授業の中で複式的に授業を実施するという方法が提案された。しかし、実際のところ、そのための教材作成が各担任のかかりの負担となっている。よって、今後、補習校のニーズに応じた補助教材の開発を行うプロジェクトを文科省、海外子女教育振興財団レベルで考えてもらえるよう、要請していくことにした。

また、中学生以上には、日本語能力試験合格という具体的な目標を設置した特別クラスを設けるほうが望ましいだろうとの見解に至った。

最後に、今後の補習校の展望を踏まえて、以下の事柄に尽力していくことを約束して校長会を閉幕した。

一、現行の帰国子女卒業受検は、短期滞在型の帰国子女にとって有利な受検になっている。今後、長期滞在、永住型帰国子女や国際児の利点を考慮した受検枠を考えてもらえるように補習校として各大学などに働きかけていく。

二、アビトゥアの科目となっている日本語の単位取得が、補習校でできるように働きかけていく。地域によって基準が異なるので、各補習校で調査をし、大使館、領事館に協力を頼む。

三、補習校の認識が日本において低い。卒業生の追跡調査を行って、その功績を明確にし、補習校の働きを見直してもらおう働きかけていく。

四、補習校間の協力関係を築き、日本政府、諸教育機関などに補習校の声を伝達し、改善していくことが今後、重要である。よって、ドイツ、またその近隣諸国の補習校とのネットワークを確かなものとしていく。(相賀)

分科会

分科会では、今回のテーマである「表現力指導」を、実際に子供たちにどう行っていくか、教師を担当学年ごとに分け、各会三時間半をかけて話し合った。幼稚部、小学校は低・中・高学年の三種、中学・高等部、日本語クラス、校長会の七つに分けて行なわれた。

話し合いの内容としては、「書く」(幼稚部では「話す」)場合に必要とされる要素「内容」「構成」「表記・文字」「語彙」「文法」の五つ

を、さらに要素ごとの問題点に分け、「内容」ならば、「題材収集」「全体を見通した事柄の整理」「事象・感想・意見の区別」それぞれの問題を実際にどのように解決すればよいか、そのためにはどのような教材を使用すればよいか、活発な意見が交わされた。その他、実際にその教材を使用し、子供の立場になり取り組んでみたり、ケーススタディとして子供の作文を提示し、推敲・訂正の手法を探ったりするなど、様々な形式で話し合いが行われた。

分科会参加者全員が、現在各地の補習校で教壇に立っている立場なので、みな似たような問題を抱えている。ほとんどの学校では学年担当が一人しかいないため、なかなか教科書単元や、能力に即応した具体的なアドバイスやアイデアがもらいにくい。分科会では、参加者が同じような視点、立場に立って、それぞれが工夫した自作の教材、また使いやすい既成の教材を持ち寄り、紹介し合うなどし、また指導の成功例、失敗例なども聞くことができ、実りの多いものとなった。(有馬)

懇親会

二日間に亘る現地採用講師研修会。少しでも何かを学んで今後の授業に役立てたい、という熱い思いは皆同じらしく、分科会ほどこもかなり内容の濃いものであった。そのため、一日目のプログラムの終了が近づいた頃には、どの顔にも疲れの色が現れていた。

それでも、似たような悩みや喜びを抱える教員間の話題は絶えない。情報交換の場とし

て、又親睦を深める目的で毎回懇親会が催されているが、今年も大変賑やかで実り多いものとなった。

受け持っているクラスで抱えている問題についての相談や、今後の学校のあり方について話している席もあれば、住んでいる地域の話に花を咲かせている席もある。

毎回懇親会に参加して驚くことは、補習校で働く先生方の背景が多様を極めることだ。抱えている悩みや問題は同じようなものでも、それに対する対処の仕方や解決法を聞いてみると、これもまた十人十色でも参考になる。

この懇親会で改めて痛感したことが他にもある。幹事校として日中の全体会や分科会の議長や書記をこなし、懇親会時には箸を動かすのも億劫そうな我が校の教員に代わって場を和やかに、又活気あるものにしてくださったのは理事会の方々だった。普段から積極的に学校の運営に携わっている方々の、豊富な経験から語られる話や助言は大変参考になったと、他校の先生方からお礼の言葉も頂いた。

懇親会で親しくなれた先生方とこれからも情報を交換し合い、お互いを高めていけたら素晴らしいことだと思う。(小栗)

研修会を終えて

研修会の本来のねらいとは、日頃の補習校で抱えている悩みを分かち合うだけではなく、教員同士が学び合い、問題に対してよりよい方法や解決方法を見つけしていくものであると

思う。そして日頃見えにくくなってしまっている、子どもの視点に立って教材を吟味することの大切さを改めて実感する場でもある。

本校は、今回の研修会の幹事校であったため、まず本校の教員同士がテーマ「表現力」についての研修を行い、学び合い、「表現力」について曖昧だった点や今後の方針についても話し合った。現地採用講師研修会では、それを土台にして、問題点、解決策を具体的に話し合い、他校からの教材例や実践例を集めて、最終的には分かりやすく表にまとめていった。

もう一つ重要なのは、子どもの視点に立って教材を吟味し、考えることである。小学部高学年の分科会では、ひとつのワークシヨップを行った。それは、普段先生として教壇に立っている参加者に子どもになりきって活動してもらった。すると様々な感想があげられた。「絵が得意ではないのに、絵で表してと言われると難しい。」「一回しか話を聞いてないと聞き逃していることがたくさんあると感じた。」「私たち教員はなかなか子どもの視点から見ることが少ない。教師は無理なことをいっていないか、やる気をなくさせることを言っていないか、この教材は本当にこの子どものためになっているのだろうか。普段の教員自身の活動を見直し、様々なことに気づく場であった。」

この二つの点で私自身は今回の研修会は本来のねらいを達成できたのではないかと思う。そして教員たちがまた次の活動につなげていけるようなエネルギーを得ることができたのではないか。

(小南)

生徒作品

幼稚部 「書き初め」

にこにこ組

お母さん、お父さんが
子どもの名前を書きました

真衣

チュオン 真衣

暁

日高 コンスタンティン 暁

安奈

森田 安奈

理桜

渡邊 理桜

하나

マンク はな

晴子

松田 晴子

入璃椰

リシュ イリヤ

花

渡辺 花

ひよこ組

アレキサンダー ゆき



池田 伊織

いおり



フェヒナー フェリシア

フェリシア



早川 ヤマト



ヤマト

稲川 ヘレナ瑠衣

ヘレナ瑠衣



石坂 清美



清美

クロースターフェルデ仁



うさぎ組

プーク フーゴ

フーゴ



池田 百花

ももか



クロースターフェルデ 源太



源太

フルバード
シャーロット



中西梨央



ナイムリナ



森本小紋



山下恭



稲川ミシャ瑠太



ザイラー
樹行



池田将



ぞう組



坂井英里樹



白戸ももこ



渡辺友暉



早川タクマ



三輪壮舞



きりん組

早川 タロウ

鈴木-孫 美宇

ギョントー ルイーゼ

丹治 悟

遠藤 レオ

渡辺 賢人

チュオンミン 健

小学部 「俳句」

クリスマス サンタがくれた
しんかんせん

小一 山本 ノア

マリナのね たんじょうびには
すしたべた

小一 水谷 オリバー

たんじょうび おいしいケーキ
たべました

小一 内山 萌那

プレゼント サンタじゃなくて
ままだった

小一 岩永 ヴィクトール

はなび見た うみのちかくで
きれいだな

小一 ヒースタント くらら

スケートに スケートのくつ
いるもんね

小一 ヒースタント ゆりあ

むずかしい
きょうりゅうのレゴ
つくるんだ

小一 有我 玲哉

うるさいな はなびのおとで
ねむれない

小一 川村 アキ

クリスマス ままにもらった
あかいびん

小一 山尾 萌香

お正月 いっぱいりょうり
ありますね

小二 フェヒナー ディアナ

オルガンに 空気が入って
音が出た

小二 日高 バレンティン

たん生日 二回ねたら
お正月

小二 小飼 莉咲

クリスマス たんじょう日にも
プレゼント

小二 ザイラー 嗣文

おおみそか 大すきなもの
エビフライ

小二 飯吉 まりあ

かんけんた いっぱいかん字
書くんだぞ

小二 奇藤 大輝

おすもうで 力を出せば
ゆうしようだ

小二 クス 実里

おおみそか とてもたのしい
うるさいね

小三 山本 杏奈

きょうかいで パパのオーボエ
かねのよう

小三 渡辺 太郎

かまきりが 大きい虫を
食べるかな

小三 三輪 明日人

お正月 おせちりょうり
おいしいね

小三 水谷 マックス健

すずめの子 いっぱいみたよ
かわいいね

小三 川面 昂

やっときた サンタクロース
こんちくわ

小四 岩永 アンドレイ

ゆきがふる しろくてさむい
あさだった

小四 小林 有理

トトロなの だいすきだよ
やわらかい

小四 佐藤 理紗

おとうさん すしをいっぱい
つくってる

小四 山尾 琉那

こっちはね しちごですよ
わかったかい

小四 ベルクマン イエスコ

みかんやま さいごのいっこ
さびしそう

小五 ゲルマー メラニー

きなこもち たべたかったよ
お正がつに

小五 ベルクマン フェリクス

美しく きらきらツリー
ひかっている

小六 ザイツ レナ

ちやらちやらと かざりが歌う
クリスマス

小六 小泉 李佳

やっと雪 雪かべ作る
たいへんだ

小六 奇藤 洋輝

花火見た バンバンバーン
大みそか

小六 岡崎 レナ

寒い中 夜外に出た
初もうで

小六 中島 光子

中学部・高等部

作文「より良い社会をつくるための

私のプロジェクト」

(五井平和財団「二〇〇八年度国際ユース
作文コンテスト」参加作品)

中学一年

より良い社会をつくるための私のプロジェクト

ギンター ソフィー

私の学校の名前は、ガブリエルフォンビュ
ローギムナジウムです。学校の勉強は、始

めはすぐくつらかったです。なぜならドイツのギムナジウムでは、宿題が多くて、毎日勉強しなければならぬからです。もう私は、勉強机からはなれられません。私の友だちも、学校のストレスがたまらなくておこっています。でも、これから授業がもっとたいへんになるので、つらくてたまりません。

先生方は、自分の教えている教科のことしか考えないので、私たちが一日にどのくらい宿題をもらっているか、知りません。宿題がもっと少なくなれば、学校の勉強ももっと楽しくなると思います。

宿題をへらすためには、まずみんなで相談して、曜日によつてちがう教科の宿題を出すようにするのがいいと思います。人間にはきゆうけいも必要です。ベルリンの教育委員会に手紙を書いて、他の学校も同じようにできたら差がつかなくていいと思います。

それから、それぞれのクラスでお金を集めて学校の修理や必要な道具を買うほうがいいと思います。なぜなら、私の学校の状態は、すぐくきたないからです。例えば、校庭はゴミだらけだし、ゴミ箱はあふれかえっているし、トイレにもトイレトペーパーがありません。みんなは、掃除をあきらめて、自分一人だけきをつけても、学校の状態はどうせかわらないと思っています。

上級生が下級生に掃除のしかたをおしえたり、上級生と下級生が協力してそうじをするか、学校で何曜日にとこの掃除をすると決まりを作るなど、みんなの意識を変える必要があると思います。ドイツの学校も、日本の学校のように、生徒が掃除をする時間を決めた

ほうがいいです。

あと日本の学校のように、給食をクラスで食べるのも楽しいかもしれません。授業は、自分で学びたい教科をえらんで、先生もクラスごとに決められるシステムだったらいいです。

学校が、みんなにとって、もっともつと楽しい場所になったらいいと思います。そのため生徒一人一人が、どうやったら学校が楽しい場所になるかを考えて、意見を言って、協力して行動するべきだと思います。

より良い社会をつくるためのぼくのプロジェクト

内山 亜門

僕の住んでいる町ベルリンには、ゴミがそこらじゅうに落ちています。町にもいっぱい落書きがあるし、道ばたでタバコを吸っている人もいて、こういう人たちは、小さい子やタバコを吸わない人に害をおよぼしています。ゴミが道ばたに落ちていて、それをやめさせるために、ゴミのポイ捨てには罰金をとるきまりを作ればいいと思います。町でそれを監視する人には、ベルリンの失業者に仕事として与えます。こういうことを仕事として認めれば、町もきれいになるし、失業者の数もへります。

町の落書きをなくすためにも、ゴミのポイ捨てと同じように、罰金をとつたらいいと思います。

ベルリンには、レストランなどの公共の建

物の中では、タバコを吸ってはいけない法律ができました。だけど、道ばたでタバコを吸ってはいけないという法律はありません。でも、僕は、道ばたでタバコを吸ってはいけないと思います。なぜなら、タバコを吸っている人の後ろで、小さい子供やタバコを吸わない人が、そのけむりを吸ったら体に悪いし、火をつけたタバコが、他の人にあたったりしたら危険だからです。道路でタバコを吸うことを禁止すれば、タバコの吸いがらゴミも道路からなくなると思います。

より良い社会をつくるための私のプロジェクト

ザイツ アンナ

私は、四年生から十二年生の生徒がいる学校にかよっています。学校の大きな問題は、トイレがきたないことや、トイレトペーパーがすぐになくなることです。宿題も多いです。きびしい先生もいます。私は、学校に行くのはきらいではないけれど、こういう問題が解決したら、もっと学校が好きになると思います。

まず、トイレがきたないこと。壁やドアに落書きがたくさんあります。たくさん落書きをしたら、またトイレの壁とドアを新しく色をぬらなくてははいけません。お金がとてもかかります。

解決するには、連帯責任としてクラスのみんながいっしょに協力する、という方法があります。自分たちでお金を集めて色を買いま

す。それから、クラスが順番にトイレの壁をきれいにしていきます。落書きをした人が、悪いことをしてしまったという気持ちになれば、もう落書きをしなくなると思います。

次に、宿題が多すぎることにについて。この問題を解決するためには、先生と相談して曜日によって宿題を出す教科を決めるなどのシステムを作れば良いと思います。こうすれば、私はもっと学校がすきになります。

中学二年

ベルリンの町をもっときれいにするプロジェクト

小宮 誠治

僕の住む町ベルリンは、ドイツの首都です。でも日本の首都東京と違って、それほど人は多くないし、緑の多い公園がたくさんあります。僕の家からは歩いて三分のところに湖だつてあります。東京の祖母の家の近くには、大きなデパートや映画館、ゲームセンターがあります。そこはいつも人がいっぱいですが、自然豊かな公園に行くためには電車で一時間くらいかかります。ベルリンでは、どこに住んでもちよっと歩くだけで公園に行けるのがすばらしいと思います。それと、ベルリンの道路はどんなところでもきちんと歩行者専用道路があります。それに自転車の道路もあって便利で安全です。東京の小さ

な道では、車が僕の横をすれすれに通っていききました。自転車も歩行者と一緒に走っているところを走っていて、ぶつかりそうで恐かったです。だから、安心して歩けるベルリンの道路はすごいと思います。

そんなベルリンでも、残念に思うことがあります。何かというと、時々、いろいろな建物の壁や、電車、バスの中に落書きを見かけることです。僕の家の入りのところもちょっとだけやられました。それから、エレベーターの中もやられました。誰が書いたのかわからないけれど、そんな落書きは大体いつも同じような字で書かれています。僕は、そんな字を見ると腹が立ちます。それは、汚されたと感じるからです。でも、僕はその字を実はかっこいいと思います。だから、それを落書きではないところで見ることができたらいいと思います。

落書きをすることは、もちろんいけないことだとみんなわかっているはずですが、法律によってもっと厳しく罰することです。落書きはみんなが見ていないときにするので、監視カメラが必要だと思います。そして、犯人には自分が書いたところを元通りになるまで消させ、その上罰金もたっぷり取れば良いと思います。

でも、どうして落書きする人がいるのだろう。仕事がなくて暇だから？酔っ払って悪ふざけしたから？自分で書いたものをみんなに見てもらいたかったから？かっこいいと思っ

ているから？
そんなに落書きがしたいなら、まだ残っているベルリンの壁を使って、いつか「落書き

大会」をやれば良いと思います。

実は、前にベルリンの壁を見た時、あまりきれいだとは思いませんでした。だから、毎年「落書き大会」をしていけば、ベルリンの壁はもつと面白くなって、いろんな人や観光客が見に来ると思います。そして、落書きの罪で集めた罰金は、一番上手だった落書き名人に賞金としてあげれば良いと思います。これが、僕の考えたプロジェクトです。

若年層の喫煙

平野 明

「あーあ、またやってる。体に良くないって知ってるはずなのに。」

若年層がタバコを吸っている所を見かけるたびにそう思います。

ベルリンでは日本と違ってタバコを十歳から十一歳ぐらいから吸う子供が結構たくさんいます。自分も一回友だちに勧められました。スケボー仲間だった一人も警察に吸っている所を見つかって捕まるなど、身の回りで色々ハプニングが起きています。

どうしてそれでも吸っているのでしょうか？一つは、自分を格好良く見せたいという思いから。それから、友達が吸っているから、という変な仲間意識も働いているかもしれません。仲間外れにされるのも嫌なのでしょう。害は色々あるけれど、その人達は良く知らないのかも知れません。

タバコによる害と言えば、長く吸っているとかかってしまう肺ガンや肌荒れ、それから

成長期に吸っていたのなら成長が止まる害があります。

自分はサックスを吹いているので、タバコは吸っていないし、吸いたくもありません。それに、安っぽい仲間意識から何か悪いことを始めるつもりもありません。

若年層の喫煙を止めるためには、まだ子供が幼児の時からタバコの害を知らせて「タバコは悪い物だ」と思いこませたり、子供の前ではタバコを吸っている所を見せないように心がけていったら若年層の喫煙を防げると思います。

いじめ

ボアマン 愛子

私は一時、クラスメートにいじめられていました。なぜならば、私は一ヶ月くらい前まで「エモ」だったからです。

「エモ」と言うのは、英語の「エモーション」を略した言葉で、そう呼ばれている人々は考え方がブラック（ネガティブ）で、暗い色の洋服しか着ず、「エモコア」や「スクーモ」など歌の半分は絶叫しているようなうるさい音楽を聞いて、リストカットをしています。

いじめが始まった当初は本当に辛く、リストカットをしたり、部屋の隅に座って、音楽を聞いていたこともありました。ガラスを地面に投げて、その破片で何回かまたリストカットをしました。私には当時友人があまりいなくて、学校の成績も悪かったのです。その時、私は本当に死にたいと思いました。皆にいじめられて、アホにされて、嫌われて、本

当に悲しかったです。

いじめられている時、頼りになった人は私のドイツの学校の先生でした。彼は本当に優しくて頼りになる先生です。私は勇気を持って先生にいじめのことを話しました。彼は私の手の傷を見てこう言い、部屋から立ち去りました。

「リストカットをしても何の解決にもならないよ。愛子、もつと自分に自信を持て。」

私は今でも彼との会話を全部覚えていますが、自分に自信を持つとうとしても皆にいじめられるのがこわくてたまりませんでした。それで私は、一番仲の良い友人とその事を話すことに決めました。彼女に傷を見せ、全部説明しました。彼女は驚いた顔で、

「なんでリストカットなどするの？それは自分をもつと傷つけるだけよ！そんなの皆を無視すればいいのよ。」

私には、そんなことでこのいじめがもうすぐおわるだろうかという不安もありましたが、それでも皆のことを無視することにしました。なぜならば、私が皆のことを無視していれば、みんなもいつか静かになるだろうと思っただからです。その作戦は成功しました。

私は「エモ」だったからいじめが始まったと思います。なぜなら、「エモ」という存在はみんなには悪い印象しか与えないし、悪い事象の象徴だし、変な音楽を聞いているし、皆ちよつと不気味なので、今考えてみるとその当時私をいじめていた人達の気持ちも少しはわかります。それでも、私たち「エモ」が変なのではなく、いじめている人達のほうが変なのだと思います。「エモ」だろうと黒人だろ

うとアジア人だろうと、みな同じ人間として、同じ扱いをするべきだからです。

もしいじめられていた子を見たら、その子一人をかばって、いじめている人を追い払いたいと思います。そして皆にどんなにいじめたいのがひどいことか知らせたいです。なぜなら、多分、多くの人はいじめがどんなにひどい事かを知らないのではないかと思うからです。

いじめのひどさを多くの人に知らせる為にできる事とは、例えばいじめのことをニュースで流したり、それについての漫画などを読ませるなどではないでしょうか。テレビやラジオで幅広く多くの人にいじめのひどさを知らせるほうが、皆にも理解してもらえらると思います。いじめられている子には「私も昔はそうだったんだよ」と言って、なぐさめてあげたいと思います。

より良い社会を作る為の私のプロジェクト

飯吉 安奈

私達ベルリン市民の間で今大きなテーマになっているのは、テンペルホーフ空港です。テンペルホーフ空港が存在していることでたくさん問題があります。

まず、ものすごい騒音です。近所に住んでいる人達は毎日離着陸する飛行機の音を聞かされ迷惑しています。また、飛行機が墜落した場合、かなり危険です。さらに、経済的なことも理由の一つになっています。ベルリンには空港が三つありますが、全部を運営す

る為のお金がベルリンにはありません。これらことからテンペルホーフ空港は閉鎖されることになりました。

その後、その場所がどのように使われるかはまだ決まっています。その広大な敷地を有効に使う為にはどんなことをすれば良いでしょうか。

もし、工場などが作られたとしたら、せっかくより良い社会を築くためのチャンスが新たな問題でつぶされてしまいます。

色々な案があると思いますが、私だったら多くの人が健康で楽しい生活を送れるようにスポーツ施設を作りたいと思います。例えば、ジョギングコースやサイクリングコースなどです。その周りには、木々が生えていたり、野原があったり、お花が咲いたり、池があったり、とにかく楽しい雰囲気があればうれしいです。

テンペルホーフ空港の建物は重要文化財に指定されているので、壊してはいけません。だから、この建物も有効に使える道を考えてみました。

第二次世界大戦後、ベルリンは壁で二つに分断されました。その時、西にあったテンペルホーフ空港へアメリカの兵士が飛行機で二分おきに食料やその他の必要物資を運んでくれたそうです。それを当時、戦争を体験した人は今でも良く覚えています。だから、彼らはその空港が閉鎖されることに反対していました。それで、私はこの人達のために、その建物の中に博物館を作りたいと思います。彼らにとって大切な思い出をどうにか形にして残してあげたいと思います。博物館の

中には戦争の時の資料や残った物を展示し、アメリカ人への恩も何らかの形で残したいと思います。

この空港とその建物のある敷地はとても広いので、色々この他にも有意義な物が作れると思います。この場所が多くの人を喜ばせる場所に生まれ変わり、人々がそのおかげで幸せになれば私も嬉しいです。

中高A

戦争はいやだ

岡崎 タニヤ

私は、戦争が大きいです。たくさん子どもや家族が死んでしまったりかなしいからです。たくさんのおうちがなくなるので、よくありません。男の人は兵たいに行くと、殺し合わなくてはなりません。テレビで、戦争で子どもたちがたくさん死んでしまったりところを見ました。私は、テレビを見ていたら、かなしくなったり、いつもチャンネルをかえてしまいます。子どもたちには、ふつう未来があるのに、この子どもたちには未来がないと思うからです。子どもは、あれがしたい、これがしたいと言えはるはずなのに、戦争だと言えません。

だから私は、戦争がきらいです。

私には、考えがあります。まず、アメリカのブッシュ大統領に会いに行きます。そして、こう言います。

「あなたの子どもがイラクに行つて死んだら、あなたは どう思いますか？」
 どんな人でも、自分の子どもが死んだらかなしいと思います。みんながそういう気持ちをもてば、戦争をやめようとする人たちがふえると思います。

貧困とベルリンの関係

ヒンツェ 泉

ベルリンに暮らしている人の中で、最近、貧困の数がふえています。貧困の数が最も多いのは、クロイツベルグとショーネベルグといわれる地区です。貧困はどうして起こるのでしょうか？ それについて考えながら、思いをあつめてみました。

一つ目は、ドイツのシステムが悪いことです。国家が財政的に助けるまでに手続きにすぐ時間がかかります。二つ目は、仕事を見つかるまで、ものすごく時間がかかったり、ほしい仕事をもらうには、高い学歴が必要になつてきたりします。三つ目に、ベルリンでは、仕事をしていない人にお金がでます。それを「Harz 4」と言います。これをもらっている人は、仕事を見つける努力をしないので、それは本当に悲しい行動だと思います。

でも、どうすることがベストになるかはわかりません。けれども、みんなが自分がよりよく暮らせるために戦うことがベストだと思います。それは、仕事をもって働き、お金をかせぐということを大切に思うことが必要だと思ふのです。

犯罪について

ヘーネル 興富

ベルリンには、いっぱい犯罪があります。たとえば、まやく、ぼうりよく、アルコール、ぬすみ。たくさんの子どもはうちでおやとけんかをします。ですから、外でがぶ飲みします。そしてほかの人とけんかをします。家にいたくないわかものは、みちであたらしいかぞくを見つめます。同じようなわかものたちであつまります。まやくちゅうじくになつて、一回はじめたら、やめることがむずかしいです。それからぬすみをはじめます。

かれらには、まったくみらいがありません。ぼくのかんがえでは、おやにせきにんがあります。いえのしつけがあまりうまくいかないからです。おやは、じぶんの子どもをよく見るべきです。おやは、おやのいいめんを子どもに見せてほしいです。

中高B

動物の絶滅について

小谷 幸穂

私は雑誌で見た動物の絶滅について目を留めた。今、世界中で絶滅の危機にさらされている動物は数え切れないほどたくさんいる。実際に、毎年千種以上もの生き物が姿を消していると言われる。動物は、食べ物や水、暮らす場所がないと当然生きていけない。そうになると、私は、一番に考えられる動物の絶滅

の原因は人間にあると考えた。私達の普段の行動が深く関わっているのではないかと興味を持ったので調べてみた。

世界各地では今、絶滅の危機にある野生動物を人の手で繁殖させて、再び野生に戻す試みがされている。例えばコウノトリ、トキなどがそうだ。日本は人工繁殖の取り組みに特に励んでいて、世界各国とも手を組み計画を進めている。繁殖に成功したため、野生に再び返すことが出来た動物も多い。

しかし、人間が人工繁殖など自然に手を出すことによってさらに動物の絶滅が進行してしまう場合もある。

山や森に住む野生の動物は、元から自然の循環の中で生きていた。動物の食べ物や水、暮らす場所などを、多くの生き物同士が、さまざまな環境と複雑に結びつき、支え合っている。そのサークルの中に、人間が手を伸ばすと大きく崩れてしまうことがある。今までの絶滅した動物も、ほとんどが人間が自然の生態系に手を出したからだ。例えば、動物園などに森にいる貴重な動物を連れてきて繁殖させようとするが、上手くいかずにさらに数を減らしてしまったり、または、繁殖させずぎて逆に生態系のバランスが崩れてしまうことがある。このように一種類の動物でさえ絶滅すれば、その動物を食料とする他の動物などに、大きな影響が出てしまい、次々に多種の動物の絶滅が進んでも、手に負えなくなってしまう。そして、いつかは私たち人間にも影響が出てくるに違いない。

しかし、動物の生態系を危機に追いやったのは人間で、当然動物の生態系を危機から守

るのは人間の責任だ。なので、少しでも動物の絶滅を速めないためにも、私たち一人一人の協力が不可欠なのではないかと私は考える。植物を守ることに、森の資源を大切にすること、私達の身近で出来ることはこんなにある。一人でも多くの人が気を使えば、絶滅から動物を救うことが可能になるはずだ。

先住民族をスタートラインにして

飯吉 仁奈

より良い社会を築くためにはと聞かれ、私は遠い過去にした経験の思い出した。日本人としてドイツに暮らしている私は、小学生の頃外人扱いをされ、差別された経験がある。この辛い思い出を記憶の奥深くにしまったはずであったが、最近人種差別というものを耳にして、あのころの感情がまた込み上げた。そして、人種差別が社会の平和を妨げているのだと考証した。

世の中には、先住民族という人種がいる。先住民族とは、現在定住している人民よりも先だつて住み着いていた民族であり、支配的民衆に認められず迫害され、彼らが支配的民衆とは全く別のライフスタイルがあったため、経済成長から取り残されていると決めつけられ、認められなかったからだ。最近になってから、オーストリア政府はアボリジニーの文化や宗教を認めるようになり、保護政策がとられている。政界の人々が自分の政策によって人権を傷つけていることを認識するまで、何万人の先住民族の犠牲者を出していたのだ。

この様な問題を解決するには、先ず人間と人間の間に高層なコミュニケーションが成り立っていないのはならない。自分中心をある程度捨てて、自分の周囲にあるものと向き合い、色んな解決法を探すということが基本である。でもそのためには、自分以外のものを理解しなくてはならない。その理解しようとするものが自分の習慣や考え方と違えば違いうほど、人間関係が深まるのではないのだと思う。

地球が大きな環境問題に直面している今、この先住民族から学ぶべきだと思う。昔から住んできた土地と深くつながっており、多くの先住民族の宗教は原始宗教である。先進国と言われる国々よりも永く、彼らは自然と周りの風土と関わってきたのだ。私たちの環境の生態系が崩れて行っている今こそ、先住民をもっと理解することが、自然保護とつながるのではないか。このようなプロジェクトによって、昔から続いている先住民族差別の問題も解決へと導かれるのではないか。

このような考察からして、私は迫害されている先住民族や少数民族を一般に知らせることから始めなければならぬと考えた。迫害や差別は国の政治から生み出されたものが多いので、当国ではそのような情報はあまり表に出ない。この国から作られた壁を貫くには、自分たちでメディアを使って自分の国、もしくは外国での先住民族に注目させるべきだ。具体的なプロジェクトとしては、学校での生徒新聞に集めた情報をパンフレットなどにして先住民族と彼らの古くから伝わってきた自然の扱い方のことを通知することが考えられ

る。または、先住民族などのライフスタイルを分かりやすくしたものを、短いプレゼンテーションという形で放課後や休憩時間を通して、生徒に興味を持たせることも可能だ。情報の受け手にも、この社会はみんな自分たちにある才能や知識を出し合っていくことで、より素晴らしくなるのだとわかってほしい。このようなマイ・プロジェクトを通して、人々が力を出し合って組み立てていく平和な社会を築きたいと思う。そして、先住民族をスタートラインとして、私たちの世の中に生きる人間全員とも少しづつ分かち合い、よりよい社会、いや世界を実現させたいと、私は願う。

温室効果ガス対策

古井 裕

今、私たちが住んでいる地球の環境が変わってきている。少しづつ暑くなってきているのだ。そうすると北・南極や他の所にある雪・氷が解けて、赤道の近くにある島々が海に沈んでしまう。また、地球が暑くなると、蚊などの虫が今まで寒くていけなかったようなところまで行けるようになり、虫が運んで来た病原菌で病気になる人が増えたりする。だから、世界の国々が、地球を暑くしている原因の温室効果ガスを減らそうとしているのだ。しかし、日本の温室効果ガスはなかなか減らない。

私は、この前偶然、学校の授業で温室効果ガスの話を勉強した。その時、地球温暖化のせいで困っている人やそれ以外の動物がいる

ことを知り、またそれと同時に、もしかして自分が地球環境を破壊しているのではないかと思つたので、これではいけないと思ひこのテーマを選ぶことにした。

世界では、温室効果ガスを減らすためにいろんな事を行っている。イギリスでは、二酸化炭素がたぐさんでる石炭・石油などの燃料から、二酸化炭素をあまり出さない燃料の天然ガスを使うようになった。ドイツでは、発電方法を変えている。自然エネルギーを使った方法に変えているのだ。風力発電や、太陽光発電が盛んに行われている。そうした発電方法では世界で一番なのだ。また、ロシアなどの旧社会主義国での政治の仕組みが変わり、こうしたガスを減らすことに成功している。

日本で温室効果ガスが減らない原因の一つに、家庭での排出量が増えているというのがあつた。だから、少し家庭での排出量を減らす方法を考えてみた。例えば、外に出かける時、バスや電車といった公共の乗り物を使って出かける。車やバイクを使わない。風呂のお湯を利用して頭や体を洗う。シャワーを使わない。電機製品の電源をこまめに消すなど、家庭で減らそうとすればかなり減らすことが出来ると思つた。

私は、一人一人が温室効果ガスのことに気をつけて日々生活をすれば、それらのガスは減っていくのだと思う。いや、そうしなければ、地球に未だかつて無かつた大事件がやってきてしまうと思う。なので、まずは自分から気をつけて行こうと思う。

それから、日本は温室効果ガスをたくさん出してしまふ火力発電が主流なので、そこは

ドイツのように水力、風力、太陽光といったガスをあまり出さない方法に切り替えるのはどうだろうか。日本ほどの先進国となれば、作れなくもないだろう。技術が世界でもトップ級なのだから。

発想の転換が地球を守る

相賀 頌子

今現在、地球環境はとても大きな問題になっている。酸性雨により森林は枯れ、温暖化により、沿岸が削りとられ、洪水や大雪が増えたりするなど、自然の生態系はどんどん崩れていく。そして、それは地球破壊や人類滅亡につながっている。それにもかかわらず、人々はグローバルな対策が不十分であると私は考える。そこでこのグローバルな対策について一つ提案を試みたい。

その提案とは、一つ目は先進国の科学技術の発想の転換だ。

今まで先進国は便利性の追及をし続けてきた。しかし、その新しく便利なものの中には、人間が生活するのに本来に必要なもの以上のものを開発し、発明してきた。そして、それは、今でもどんどん新たなものが改良され、大量生産を続けている。しかし、まず二酸化炭素を減らすという観点から考えると、そういった人間にとって本来に必要なではない便利な物を最低限まで排除するべきであると考える。

確かに、そういった物を排除すると、新たな問題が次々に発生するだろう。例えば、経

済力の低下や失業者の倍増などだ。しかし、各国がいま最も優先するべきものは、地球環境を守ることである。さらに、今あげた問題は解決することが不可能ではない。

例えば、具体的な例をいえば、テレビをデジタル化するために今までのアナログテレビが今後、不必要になる。しかしこれは、あくまでも便利性の追求であり、これは生活上、どうしても必要なことではない。また、自動車もモデルを次から次へと生活の必要以上に新しい機種へと進化させている。結局、古い型は廃棄されるだけだ。こういったところに使われる技術の革新が地球環境を守るための技術開発にのみ生かされるべきだ。そして、それを政府側も援助し、国として取り組むべきである。

戦後、先進国は急速な技術革新をして、産業を発展させてきた。それはイコール生活の便利性および国益の追求であった。しかし、今はその科学技術の発想を便利性、利潤の追求から地球環境を守ることと切り替えるべきである。そして、それを目指した新たな産業を生み出していけば、失業者、経済力の低下といった問題も解決できると考える。

二つ目は一般市民の生活の発想の転換だ。一般市民も生活の中での便利性の追求ばかりをせずに、環境を守るためにあえて不便な生活を選んでいくべきである。これは、不可能なことではない。ただ、単に数十年前の生活に戻ればよいのである。例えば、プラスチック容器を使わずにビンに変える。あるいは、町中にある自動販売機をすべて撤退させる。さらに、ネオンを廃止し、新聞の折込み紙を

すべて廃止して、町の掲示板を利用する。このような当たり前となっている不必要な便利性を取り除くだけでも、地球を守る第一歩となるはずである。

さらに、これを促進させるために、地球全体レベルで行っている「地球環境時計」による取り組みを、各地域レベルでも「地域環境時計」として取り組み、もつと人々にとって身近な問題となり、具体的な対策が次々に生まれてくるのではないだろうか。

このような発想の転換および具体的な取り組みこそが今求められている。そして、以上のような取り組みが、これからの地球環境を守る道標になるのではないかと私は考える。

気候の変動を止めるための小さいアイデア

アルディアカ・ジョベール メルセー

現代、「地球レベルの気候の変化」ということは誰でも聞いたことがあるが、実はその原因と影響の因果関係は明らかではない。ある学者は只の周期的な現象であると考えている。一方、人類の生活が気候変化に影響を与えているとも見られている。しかし、両方とも気候が生態系に不吉な方向を与えられるという点では同じ見解だ。

具体例としては世界中—オーストラリアとアメリカ大陸から、ヨーロッパ、アフリカにかけての砂漠化が進行している。その上、自然だけではなく、開発途上国の疲弊にも及んでいる。工業国の大方は穏やかな気候帯にあるが、開発途上国の大方は赤道地帯にあるこ

とから温暖化、昇温の影響は特に開発途上国にあるが、具体的には、干魃、冠水、開発の低下、窮乏の増加などがあげられる。この環境状態は我々地球の住民にとって容認できることではない。

都市化された新技術の環境に生きている人間にとって一見は生態系とは無関係に生活しているように見えるが、実は、毎日この自然を左右する原因を作っている。飲み物を買ったり、映画を見に行ったり、新聞を読んだりなど、直接的か間接的に影響しているのである。

それを忘れずにいれば、小さい行動で自分の生息地の自壊を避けることができるかもしれない。さらに、「気候の変化」の主な問題は過大な天然資源の開発であることから、その解決のために天然資源消費を減らし、再利用とリサイクルすることが重要であると考える。それは些細なことでも解決できる。例えば、歯を磨くとき、水道を閉めたり、お風呂に入る代わりにシャワーを浴びたりすることなどだ。日本でのお風呂のシステム、つまり家族全員が同じお湯に入ること、これは見事な天然資源再利用である。さらに、私が考えるオリジナルなアイデアとしては、家庭の水道の圧力を下げたり、トイレの洗浄水槽にレンガを入れるなどだ。こうしたら、洗浄する時は消費する水が少なくなるので効率的ではないか。

水の消費だけではなく、あらゆることに人の持つ想像力を使えばいいアイデアが次々に生まれ、世界の進歩を変えることができる。といっても過言ではない。

行事あれこれ

研修ワークショップ

—漢字教育の発想転換—

教員 松田 咲樹

去る二〇〇八年十二月六日(土)、本校で研修ワークショップ「漢字教育の発想転換」が開催された。講師に山田ボヒネック頼子ベルリン自由大学日本学科准教授をお招きし、総勢三十名参加のもと、八時間漢字教育について学んだ。

日本語を習得する上で漢字学習は不可避である。本学園では漢検をはじめ漢字学習に取り組んでいるが、漢字定着に日々頭を悩ませている。問題は様々だが、事例の一つに「繰り返し練習をしても、漢字が『絵』として記憶に残らない児童生徒」が挙げられる。短文の中で同じ漢字が二、三回出てその都度初めて見るような反応をし、意味も、読みも記憶に残っていないのだ。そしてこの事例を考察すると、漢字定着には聴覚(音)と視覚(絵)への刺激の繰り返し返しが一体化する必要性が見えてきた。

海外在住の本校の児童生徒は、日本語に触れる機会が圧倒的に少ない。そのため最初の段階の「音」としての言葉の定着が不足している。にもかかわらず「絵」としての定着を求めると、それは多大な努力の割には定着しないという結果になる。これではますます漢字苦手意識、日本語嫌いを育ててしまう。

この問題を背景として今回山田准教授にワークシヨップを打診した。准教授は「日本式漢字教育方策」を根本から改革する研究、取り組みを実践されている方で、今回のワークシヨップではこれらの漢字習得の問題を解決すべく、新たなアプローチについて講義をしていただいた。

ワークシヨップでは、まず講師が開発されたソフト、「漢字クリアタイプ」の説明がなされた。これは漢字の「意味と字形」を視覚的に学ぶソフトであり、まず二百八十の漢字の核となる「原子」を暗記する事から始まる。学習者は短時間でその原子をどんどん記憶し、最終的には原子を組み合わせる事で漢字を習得する。この利点は漢字を「見たことがある」という感覚を養い、漢字に対する拒否反応をなくすことにある。

その後、漢字を体で表現するなどの「体現化」を行った。原子の組み合わせで漢字を作成したり、時には想像の漢字を作ってみたりと、多岐にわたるゲーム感覚の活動だった。この活動のねらいは言語を五官（目・鼻・耳・舌・皮膚／身体）すべてを活性化しながら、「からだ・こえ・ことば」という原点に戻り、漢字をまさしく「身に付ける」という点にある。

その後、日本語表記と日本語の言語的特徴を体感する活動を行った。字幕付きの音楽ビデオで全員で歌ったり、メリハリや感情を入れ詩を群読した。これは体に日本語のリズムを染み込ませるねらいがある。そしてワークシヨップの最後には活発な質疑応答がなされた。

このワークシヨップを通して、様々な漢字学習のアプローチが見えてきた。今後どのように本校の漢字学習に反映させるか、新たな試みを教員会では目下検討中である。

漢字ワークシヨップに参加して

森本 雪子

「漢字を体で覚える」という概念を根底に開発された『漢字クリアタイプ』のワークシヨップに参加させて頂き、改めて「学ぶこと」の原点に触れた気がする。「五官を使いながら習得していく」という発想は、漢字の学習に限らず、学ぶこと全般において大切なことだと思う。それは幼児期に色々な能力を身に付けていく段階で最も顕著で自然なことだろうが、私自身、博士課程に挑む大学院生として、その後も学問を究めていく研究者として、そして同時に大学で教鞭をとる側として、そのつど、学習過程において五官を使う機会が与えられるほど学習能力が高まり（理解しやすい、覚えやすいなど）、記憶の中にインプットされやすいと実感してきた。さらに、山田先生が漢字学習でも取り入れていられる「見たことがある」という感覚、もう少し幅広くいえば「自分の過去の経験に関連付けられるものがある」という感覚が新しいものを（効率よく）習得するための大切な鍵になるというのともとても共感できる。こういった「学習の原点」をしっかりと認識されそれを土台に築かれた理論は、どの研究者も目指す「シンプルでエレガント」なもので、その理論に基づ

き開発された漢字学習法も魅力あるアプローチだ。

「子ども向けに書かれたものはひらがなばかりでかえって読みにくく難しい」という山田先生のコメントも印象的だ。これからは日常生活でも不自然に子どもから漢字を遠ざけてしまわず、早いうちから漢字に見慣れることも効果的ではないかと考えるようになった。六ヶ月の息子を連れてワークシヨップに参加し、皆様にご迷惑だったかもしれないが、私にとつては収穫の多い勉強会になり、主催してくださった教員会の皆様にも感謝したい。そして今後の漢字教育改革に向けて、今回のワークシヨップをいかしていければと願っている。

学習発表会

ザイラー 瑞恵

私は、小さい頃、学芸会とか発表会とかが大嫌いでした。間違わないでできるだろうか、うまくやれるだろうか、とばかり考えていて、本番になるといつもあがってしまい、結局いやな思い出しが残らなかつたからです。

中央学園での学習発表会でも、子供よりも自分のほうが心配ばかりして、発表会の何日前か前、小栗先生に「きあんは家で練習したけれど、当日舞台の上でちゃんとやれるかどうか心配です。」とメールしたところ、先生から、「発表会では、ちゃんとできるかどうかが大事なのではなく、終わったあと、あー楽しか

ったな、またやりたいなあ、と子供たちが思
つてくれたらいいんですよ。」とこんなメール
が返ってきました。私は何か恥ずかしくなる
ような思いで「そうか、発表会というのは発
表するほうが楽しくなければいけないんだ。
私が小さい頃嫌いだっただのは、一度も楽しい
と思えなかったからなんだ。」と納得しまし
た。さて、当日、午前中の幼稚部の発表では、
もちろんじっとしていない子も、自分のクラ
スでない舞台上上がる子もいましたが、(わ
が息子もその一人!)みんな楽しそうに、そ
して少し誇らしげに発表してくれました。見
ている保護者のほうが思わず笑ってしまうこ
とも何度か・・・最後に、本年度から幼
稚部の一貫教育に組み入れられた「ここにこ
組」のかわいい発表もあり幼稚部学習発表会
は和やかに、あつという間に終わってしま
いました。そして、帰り支度をしながら、「楽し
かった?」と私が息子に聞くと、最初から最
後まで舞台の上に出っぱなした彼は、少
し赤みの増した顔で「うん!」とはっきり答
えてくれました。

その後、お昼休みをはさんで、今度は小学
生以上の発表が始まりました。

一、二年生の、楽しい踊りの入った《おむ
すびころりん》、三、四年生の、何度も客席を
わかせてくれた《三年峠》、五、六年生の、台
詞が長くて難しい歌舞伎《白浪五人男》浜松
屋の場《への挑戦》、そして、中高生の、客席
の何人もが感動して泣いていた《少年の日の
思い出》、どれもがすばらしく、何よりも発表
を終えた生徒たちの満足そうな顔が輝いてい
たのを覚えています。

そして大切なことは、幼稚部において思っ
たことと同じ、演じている生徒が「楽しかつ
た、またやりたいなあ」と思っていること。
これが客席にいる人たちを感動させる基本に
なっているのではないかと思います。

最後に、毎年この学習発表会にかける先生
方の情熱と、生徒たちへの愛情に感謝を込め
てお礼を言いたいと思います。ありがとうございます。

小正月会

丹治 由紀子

中央学園最大行事の一つ小正月会、今年も
楽しく賑やかな会となりました。

小正月とは旧暦元旦の名残で、現行の太陽
暦一月十五日頃、一年で一番最初の満月にも
う一度正月祝いをするもので、身の周りを清
め年の神を迎える大正月に比べ、家庭的で生
活に根ざした行事が多く、有名な所では、大
きな火を焚き無病息災を祈る「どんど焼き」
や、豊作を願う木の枝に紅白の餅を付け飾る
「まゆ玉」等が知られています。女正月とも
呼ばれ、大晦日から正月にかけて慌ただしく
準備に追われた女性達が、骨休めをしながら
ゆっくりとお祝いし直すという習慣も見られ
ます。

私自身実家では、家族が集まっておせち料
理を頂き、初詣に参り、三ヶ日はのんびり過
ごすという事くらいしか有りませんでしたの
で、大勢の人が皆で協力し合って自ら会を準

備し盛り上げて行く中央学園の小正月会は、
新鮮でもあり、毎年楽しみな行事の一つです。
小正月会に限らず、いつも中央学園の行事
を見ていて感じるのは、子供達の間にか彼
らを結びつける「つながり」がある事です。
日本国外に暮らす子供達にとってこの「仲間
が居る」と確認出来る機会を持つのは、本当
に重要な事です。年齢や日常生活での違いも
気にならないように、特に上級の生徒が年下
の生徒の面倒をよく見る事には感心します。

ベルリンに住んでいるからこそ、日本の行
事の楽しさや心情の細やかさが際立って感じ
られる場合が有ります。遠く離れて思い知る
故郷の良さを、またも痛感した次第です。

漢字検定

中島 花代

うちの娘はもう六年生なので、学校や他の
習い事から帰ってきて就寝するまでの限られ
た時間をどうやって使うかは本人にまかせて
います。というより、ドアの閉まっている彼
女の部屋をいちいちあけてチェックするのは、
自分もされていやだったのを覚えていますの
で。

まず、学校の宿題がほとんど毎日あるので、
彼女は寝るまでそれに追われていること、そ
してきつとコンピュータを開けて友達とチ
ャットしたり、ユーチューブでビヨンセの新
曲をチェックしたりもしているのでしよう。本
人に「漢検の勉強は大丈夫?」と尋ねたとこ

る「ちゃんとやってるよ」と返事が返ってききましたので、一応信頼するしかないのです！正直な話、「今回もし受からなくてもゆっくり頑張ればいいや」と彼女は思っていると思います。

私が協力出来ることといえば、彼女になるべく多くの漢字を見る機会を作ってあげることだと思っています。日本のまんがや本を与えても今はあまり興味がないようで、お風呂場に漢字表を張ったりしていますが、見てるのかな？先生に作ってもらっている漢字カードを切って、単語帳にしてやっつて「電車で見てもね」とお願いしていますが、きつと彼女通学路ではiPodをきいています・・・。

あまりお役に立つお話がありませんが、うちの漢字検定に取り組む姿勢はこんな感じですよ。

学年会より

小正月会

フェヒナー 弘子

寒い中にも春の気配が感じられるようになる雨水（うすい）の日が過ぎましたが、実際は、まだ雪が降り、寒いベルリン。冬のどんよりとした気分を変える為にお雛様を出しました。この日にお雛様を出すと、縁起が良いそうです。

さて、今年の小正月会は、先生方々はじめ保護者の皆様のおかげで無事に終えることが

できました。

カルタ会から始まり、臼と杵を使った餅つき。そして一番盛りあがったといっても過言ではない相撲大会！普段はおとなしいと思っていた子達までもが大活躍でした。その後は剣道、居合道、書道、お茶といった伝統文化の紹介、音音アンサンブルの方々は、すばらしい演奏を聞かせてくれました。今の日本でも中々お目にかかれない事ではないでしょうか。

この間、日本にいる家族と話しをしてみると最近のお正月は昔と違い普段の日とあまり変わらないそうです。三が日、家にいるどころかお正月の用意が大変なので年末から旅行に行く人も多いと言っていました。

ドイツにいながらお正月の雰囲気を感じる小正月会。そこには、確かに日本の雅が漂っていました。形を重視して昔のとおりによつていく。そうするうちに精神的なものも、ともなっていく。特に日本で育ってない子供達にとつて、お正月という文化を築かせる為には、大切な行事です。この会を通して、少しでも日本の雅を感じとってほしいと願っています。

最後になりましたが、小正月会の準備や片付け、お手伝い、日本食を寄付して下さった保護者の皆様、本当にありがとうございます。



理事会より

土屋さんの思い出

内山 佳代子

昨年十月、法務理事として二〇〇六年度まで本校運営にご尽力くださった土屋健二さんが逝去されました。

土屋さんとは、理事会で一緒に働いていたことではないのですが、同じ年の子供を持つ親同士のよしみで、よくお話をしました。一人娘である由ちゃんが、どうすればもっと日本語に興味をもってくれるか、日本を好きになってくれるか、それが土屋さんの最大の話題でした。どんなにお仕事が忙しくても、金曜午後の学校への送り迎えをかかされたことはありませんでした。今度の日曜も二人で頭を並べて日本語の宿題をしないといけないのでたいへんだといながら、お顔ではいつもにこにこ嬉しそうでした。「由ちゃんが大人になったら、お父さんといろいろなことについて日本語で話そうよ。」いつかの文集のコメントで、土屋さんがこんなふうにかかれていたのを覚えています。

私は、死が、この世に生きる者と違う時空に旅立つ者とを隔てるとは思っていません。ただ、土屋さんともうお会いすることはできませんし、あのやさしい笑顔を見ることはできません。それがとても悲しい。土屋さんを知る人は皆さん、そう感じただと思います。謹んで哀悼の意をささげるとともに、ご冥福をお祈りいたします。

II 短信 II

- 「ドイツ地区補習授業校現地採用講師研修会」幹事校として開催
(十月十八日～十九日)
- 土屋健二氏の葬儀出席
(理事会・教員会 十月二十四日)
- 海外子女教育振興財団川島理事と面会
(理事長・校長 十一月十一日)
- 「学習発表会」開催 (十一月二十二日) ご来賓
在ドイツ日本国大使館より 領事 石塚 勇人様
- 「漢字ワークショップ」開催
講師 山田ボヒネック 頼子様 (十二月六日)
- 神余隆博大使へ表敬訪問
(理事長・校長 十二月九日)
- ベルリン日本人国際学校主催「クリスマス会」出席
(校長・校長補佐 十二月十六日)
- 大使館「新年名刺交換会」出席
(理事会 一月十三日)
- 「小正月会」開催 (國技館 一月十七日) ご来賓
在ドイツ日本国大使館より 領事 石塚 勇人様
ベルリン日本人国際学校より 校長 相模 眞枝様

○新規採用講師面接

- (理事会 一月二十日、二月二十七日)
- 「日本漢字能力検定」実施 (二月十三日)
- 「卒入学式」開催予定 (三月二十八日)

II 寄付・その他 II

- 玩具・書籍・・・河野宏美さん(旧会員)
- ふた付紙コップ・・・小宮尚子さん(正会員)
- 書籍・・・飯吉真子さん(正会員)
- ビデオ・DVD・・・川面麻希さん(正会員)
- 小正月会

- 白・杵借用・・・レストラン大都会様
- 生け花・抹茶二缶・・・天本弥生様
- 書道・・・平田稔様
- 茶道・・・クス八千恵さん(正会員)
- フェヒナー弘子さん(正会員)
- 剣道・・・三輪朋也さん(正会員)
- 大井裕見子さん(職員)
- 内山亜門くん(中一)
- 足立悠人くん(小五)
- 足立桂太くん(小五)
- 居合道・・・大井裕見子さん(職員)
- 歌・演奏・・・音音アンサンブルの皆様
- 準備等・軽食・・・会員の皆様
- Tober & Co. GmbH
- Steuerberatungsgesellschaft
- Lohnsteuerabrechnung für den Angestellten

皆様方のご厚意に心より感謝申し上げます。

あとがき

夢を見た。電車を逃しそうになつてなぜかわからないけど、脇目もふらず懸命に走った。ぎりぎりのところでやっぱり乗り逃した。しかし、その電車が去った後の空間は、後悔というよりむしろすがすがしさに満ちていた。急に自分の呼吸や太陽の日差し、駅線路沿いのどかな風景、花の匂いそして鳥の声に気がついて、がむしやりに走っていた一分前とはまったく違う具体の世界を味わっているのだ。きつと電車に乗ってしまったら気付かせてもらえなかった世界。この世の中にはそんなことたくさんある。つまずいたから、失敗したから自分と向き合った、自分と周りとの関係を見つめ直した、人のぬくもりに感謝した。目覚めた時ふと相田みつをさんの詩が思い浮かんだ。「つまづいたっていいじゃないか にんげんだもの」今までの「つまずき」に感謝し、そしてこれからまた味わうであろう「すがすがしさ」に興奮した。(なみ)

共益法人
ベルリン中央学園
補習授業校
校舎 c/o Comenius-Schule
Gieselerstr.4
10713 Berlin

連絡先

電話: +49(0)30 8639 4196
FAX: +49(0)30 8639 4197
E-mail アドレス:
webmaster_chuogakuen_de
@yahoo.co.jp

ホームページ

www.chuo-gakuen.de